

達者集落における獨協大学の取り組みを振り返る

獨協大学外国語学部交流文化学科

鈴木ゼミ

後藤勇道 田谷哲史

1. これまでのゼミ合宿の概要

獨協大学外国語学部交流文化学科鈴木ゼミでは、2015年度より2019年度まで達者集落で夏季にゼミ合宿を行ってきた。滞在中は達者集落センターに宿泊し、食事については主に集落からいただいた差し入れの食材を用いて自炊を行い、風呂についても集落の厚意により個人宅でお借りしてきた。期間は、4泊5日～6泊7日程度で、これまで延べ100名以上の学生が参加している。

本ゼミの研究テーマは、観光研究、観光文化論である。文化人類学や社会学、地理学などに基礎を置く観光研究の成果を参照しながら、観光という現象、とりわけ昭和40年代から平成初期にかけての大衆・大量・団体観光（マス・ツーリズム）が地域で暮らす人々の生活にいかなる影響を与えてきたのかを探るのが学生に与えられた課題である。学生たちは集落での生活や佐渡観光に関連した個人テーマを設定し、滞在中聞き取り調査や参与観察を行う。また毎年個人テーマとは別に共通のテーマを設定し、課題に取り組んでいる。研究の成果は報告書にまとめ、毎年度末に集落宛に送付している。これまでの報告書のタイトルは、『達者の暮らしからみる観光』『達者の暮らしと観光の80年』『観光の盛衰と達者の暮らし』『尖閣湾達者・姫津の暮らしと観光』などである。

毎年10月に行われる達者集落の祭礼にも有志学生や卒業生が多数参加してきた。参加した学生は、太鼓の運搬を手伝ったり、獅子の中に入ったり、集落を門付けしてまわる青年会の手伝いを行う。調査合宿中に短時間ではあるが青年会主導による芸能ワークショップが開催されるため、学生たちにとっては太鼓や獅子は初めての経験ではない。ただし夏季休暇中ではないため学生たちは授業の合間を縫って、あるいは卒業生は業務の傍ら有給休暇を取得するなどして、自費で佐渡へと渡り、これまで30名以上の学生や卒業生が祭りに参加している。また2016年には東京・池袋で行われたイベント「アイランダー2016」にて鬼太鼓披露の補助をしたり、2018年には、アースセレブレーションでも出演した達者青年会のお手伝いをしたりしている。

以上のように夏季休暇中の調査合宿を中心に、達者祭りや関連するイベントの場で達者集落と獨協大学鈴木ゼミの交流が継続して行われてきた。またこれ以外にも、集落の方々が首都圏を訪れた際に、個別に学生と交流する機会も多数存在している。

2. 本年度の取り組み

新型コロナウイルスの感染拡大によって、大学側から宿泊をとまなう調査合宿が禁止されたため、2020年度および2021年度の調査合宿は中止となった。そのため2021年度は、ゼミの公式行事としてではなく有志学生のみでの参加とし、日程も大幅に短縮し内容を改変して調査合宿を行った。

具体的には、これまでの調査でも多くの学生がテーマにしてきた世界遺産登録と観光の関係や佐渡観光の歴史にかかわる観光地を巡るとともに、達者集落における獨協大学の取り組みを振り返るミニ・ワークショップを行った。ワークショップでは、集落の皆様からこれまでの活動に対する忌憚ない意見が述べられたほか、参加学生から今後のゼミ調査合宿への提案などが行われた。

3. 取り組みの意図と成果

本ゼミの研究テーマは、「観光が地域にもたらす影響とは何か」であり、必ずしも直接的に地域活性化、あるいは観光振興にかかわる提案と結びつくものではない。ツアープラン企画などの課題解決・提案型プログラムと異なり、短期間で目に見える形で研究成果が示されることが困難であり、報告書の内容も集落の方々の興味関心と全てが合致しているとは限らない。しかしゼミ合宿が日常の学習活動の延長上で行われている以上、これは学問分野の特性によるものでやむを得ないと考えている。

とはいえ、このような取り組みが地域活性化において無意味とは言えないのではないだろうか。なぜならば、学生が地域場で学習／研究活動を行いその一環で集落との交流を継続的に行うことによって、「結果として」地域に貢献する可能性もあるからである。当然のことながら、課題解決・提案型のプログラムのみが大学と地域が交流する手段ではない。既に数多くの大学、研究者が来訪していることが示しているように、佐渡が有する歴史や文化、自然環境は、あらゆる学問分野の研究対象となりうる。だとすれば、直接的に「課題解決」を目的としない大学の調査合宿が研究活動のみに閉じることなく集落や地域と交流すれば、大学と地域の連携がより幅広い研究分野と多数の集落・地区との間で可能となり、むしろ佐渡の活性化に資するのではないだろうか。

「結果として」貢献するための活動として、これまでの取り組みでは調査の合間に英語教室を中心とした子供たちとの交流やシーカヤックなど地域の資源を活用したプログラム、祭礼への参加を行ってきた。本年度はミニ・ワークショップを通じてこれまでの取り組みが集落の皆様からも一定の評価を得ていることが確認できた。それを踏まえ次年度以降は、「結果として」地域に貢献するゼミ合宿の次のステップを目指したいと考えている。

(文責：鈴木涼太郎)